

# 日本白鳥の会定時定点調査について

玉 田 誠

## I 定時定点調査の概要

「定時定点調査」なる言葉の使用とその実施は、昭和48年6月24日東京四ッ谷駅前の主婦会館において開催された日本白鳥の会（以下・本会と略称）の設立総会の席上、初代事務局長となられた本田清氏からの提案に端を発している。そもそもの提案は「日本白鳥の会・今シーズンの調査重点目標」の一つとして取り上げられたものであり次の様に記録されている。

### 1. ハクチョウ類の定時定点観測

各会員は、それぞれの担当地区にあって、ハクチョウ類の初渡来日時・帰北終認日時の確認のほか、10月から翌年4月までの各月の第2日曜日午前8時より午前10時までの間のハクチョウ類の渡来数を調査し、終了後事務局まで報告する事。調査票の報告様式は別選（紙）のとおり。（2・3項は省略する）

調査内容の主なもの、オオハクチョウ（以下オオハクと略称）・コハクチョウ（以下コハクと略称）・種不明チョウのそれぞれについての成鳥・幼鳥・成幼不明鳥の数・その他（調査域内での特定エリアを設定してでの前記項目）などであった。（後に標識〈バンデング〉鳥の観察日時が追加された）

文面からするとこの調査は今シーズン（自昭和48年10月一―至昭和49年4月＝48シーズン）限りの様に受け取られるが、20年後の今日に至るまで紆余曲折はあったが表向きは連綿として継続実施されてきている。渡来ハクチョウ類の北限地域から南限地域に亘る80数地点の統一調査（観察）を可能としてきた理由の一つは、ハクチョウ類の保護に関心を有する人や学識経験者以上の数のそれぞれの地域にあっては、「気違い・馬鹿・物好きにも程があるセンセイ」などと陰口を叩かれながらハクチョウたちとスキンシップ的接触を保っている人が会員となっていたからにはほかならない。

この定時定点調査は毎年行われてきた「研修会」と共に本会の2大事業の一つと考えられるが、会則の第3条（事業）には明文化されておらず ④（その他本会の目的を達成する事業）の中に含まれてでもいる様な日陰者扱いである。

昭和53年シーズン分からは報告様式を二、三の理由から、シーズン分一括一葉の封書郵送から、調査地名と報告者名と調査数を書き込んで投函すればいいだけの葉書による月毎の報告に切り替えられ、会員は封筒の表書きや切手の購入・張り付け投函から開放された。54シーズンからは新潟の事務局への報告を北海道の玉田理事宛の直送に変更し、定時定点調査に関する業務の一切が事務局の手を煩わす事が無くなった。一方56シーズンからはそれまでの毎月1回・第2日曜日の調査に加えて第4日曜日も調査する事となりシーズン中のハクチョウ類の移動等がより木目細かく知り得る様になった。しかし諸種の事情があって58シーズンからは定時定点調査に関する作業は再び事務局

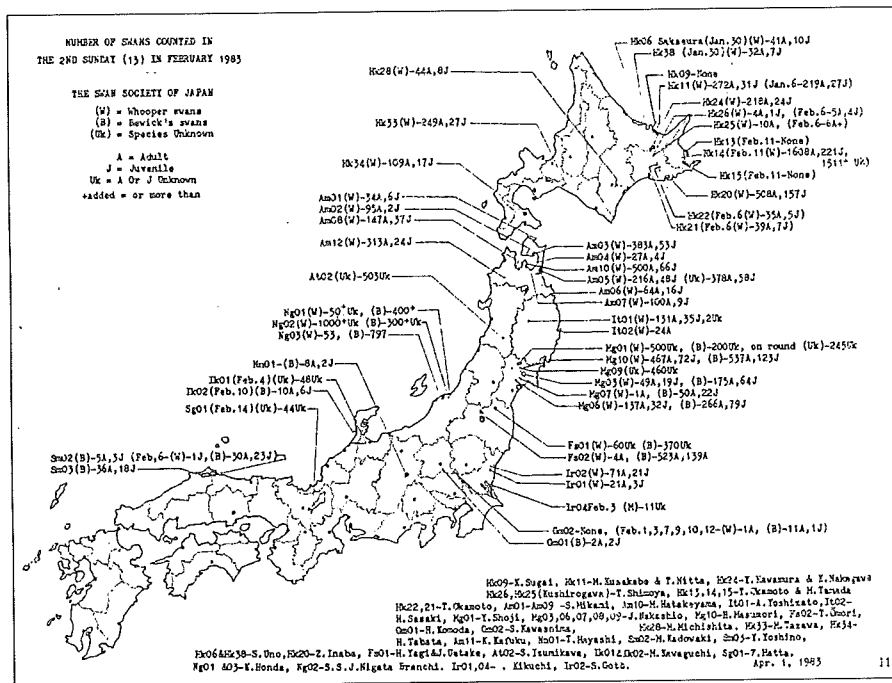
(在札幌) 経由となり菊地理事が担当して今日に及んでいる。

## II 会報「日本の白鳥」と調査資料

会報「日本の白鳥」(以下会報と略称)については特別な申し合わせは無かったが毎号翌年の総会には間に合うように発行されてきた。第1号・第2号は総会の記録で埋められており「およその会や雑誌の発行は、3回ぐらいになるとおかしくなる」というジンスにもめげず会報としての体裁もようやく整った会報第3号(昭和51年)に第1回の定時定点調査の集計結果が公表されたが48シーズン・49シーズンの2シーズン分のみが掲載され、50シーズンの調査結果は掲載されなかった。総会の開催が6月では調査結果の集計に手間取り掲載が不可能であったのである。(※)その後総会が9月以降に持たれるようになってからの会報には欠かさず前シーズンの調査結果が掲載されるようになった。定時定点調査が毎月2回になってからは調査資料と標識(バンデング)鳥の確認資料の量は会報内で40頁に達する事もあり重要な資料ではあるが、一方では他の論文・報告などの掲載スペースを圧迫しているようにも見える。

## III 「日本の白鳥」・速報版

報告様式の変更(毎月)により最終集計を会報に載せる事には変更は無かったが、途中集計が可能となったので昭和53シーズンからは「速報版」として1シーズン中に3回ないし4回の調査資料を会員に送付する事ができた。昭和57シーズン分の速報はそれまでの活字を1字1字、拾い打ちする和文タイプによる煩雑さから逃れるため英文タイプによって日本地図を用いて、該当調査地点か



昭和57(年)シーズンの速報版(1983年2月第2日曜日)

ら引出線で調査データを打ち込んだものとした。そのために調査地点名にコード番号を設定した。担当者の負担は甚だ軽減されたがアルファベットと数値のみの様式は一部の会員には不評でその(57)シーズン限りのものとなった。「速報版」は平成元年まで発行されたが以後は打ち切りとなった。調査地点のコードナンバーについては現在有名無実的な調査地もある一方、新調査地に対しては与えられていないコードナンバーレスな地点もかなり存在する。

※<sup>1</sup> 調査記録の遅着・延着や未着は担当者の私も随分手を焼いたが、この事は本田氏が担当していた時も、また菊地氏が担当している現在でも改善されてはいないのではないと思われる。担当者の多忙や怠慢だけでなくこうした事が因となり定時定点調査資料が未掲載の会報が発行されたり、現にここ3年ほどの調査資料は未掲載のまままで発行されていて真面目に調査資料を送付している者は不審に思っているのではないだろうか。

#### IV 定時定点調査に係る問題点と私感

##### 1. 調査日の設定

調査日を日曜日とした事は、年によっては月単位で見ると同じ第2日曜日といっても1日から6日の間で変動がある。今年の第2日曜日は前年の又は次年の第2日曜日と同一日とはならない。一週間の差といえば、濤沸湖に例をとれば最大羽数を示す日と、大半が北帰してしまう日がこのズレの中に入ってしまう。つまり、ある年では最大羽数前後の資料となり、ある年では少数羽の資料となって同一調査地であっても資料の比較は出来ない事になる。毎月3の日とか5の日とかにすべきであったと思う。

##### 2. 調査の時間帯

渡来(調査)地の東限地と西限地では約50分の時差がある。西限地での日の出の頃東限地の太陽はすでに地平線上約数度の天空にある。ハクチョウ類の行動は太陽の運行と無関係ではない。午前8時から10時という時間帯ではすべての調査地が明るくなっており、調査作業に支障を来すような事はない。しかしハクチョウ類が既に何らかの行動を起こしている調査地(ネグラと採餌地を異にする群れなど)も少なくない。また部分的にもせよ観光地化した調査地では客の撒餌にハクチョウが右往左往・離合集散して調査の妨げとなる。定時の時間帯を「地方時」の5～7時頃とすべきではなかったか。

##### 3. 調査地が抱える悩み

瓢湖のような小面積の調査地もあるし野付湾(一般には尾岱沼=春別川河口付近)や濤沸湖のような広範囲にわたる調査地もある。地形や道路の関係で実数をつかみ難い調査地もあり、こうした調査地にあっては部分的な調査地点での値で我慢しなければならない場合が起きる。一方近接した湖沼群地域でハクチョウ類が(彼女たちの都合で)行き来しているところでは、それらの湖沼での調査値を統括してひとつの湖沼名をもって調査地点とすべきであるという意見もある。瓢湖での見学結果を述べると同湖でオオハク・コハク、その成・幼別の調査などは不可能である様に思えた。また一調査地点で複数の調査者がおり、互いに無連絡で調査している所もある。「仲を取り持つ巡航船」役が必要である。

#### 4. 調査者

本会発足当時の会員の平均年齢は65歳前後ではなかったろうか。寄る年並には勝てず調査（ハクチョウ類の世話）から身を引いた人もいる。ハクチョウ類の世話が主であった様な調査地では後継者が育たない所が多い。所謂バードウォッチングなどと異なり、やる事が地味であるから2、3年はどうにか持つが5年、10年と持続させる事は困難である。マスコミなどの求めに応じての不特定日時の調査などには熱が入るが線香花火みたいな物で持続性がない。取り持役が必要である。

#### 5. 新開?地

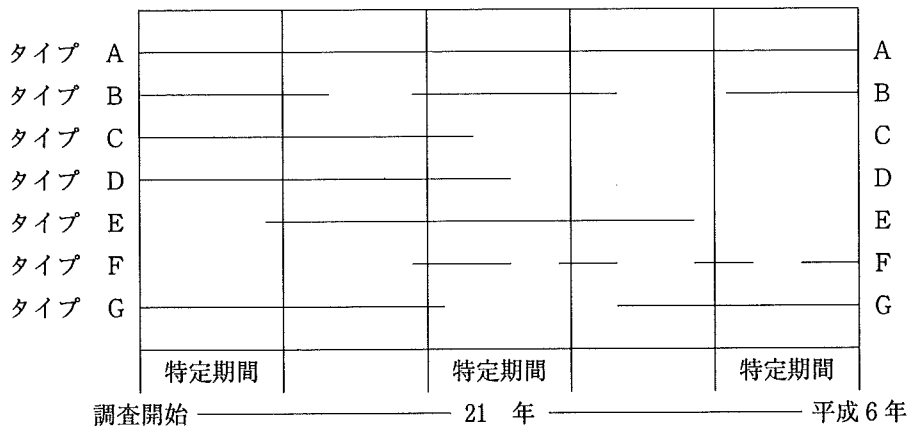
先にも見たとおりコード・ナンバーを持たない（与えられることなく放置されている）調査地もかなりあるが、新手の「気違い」が開発?したハクチョウ類の中継地や越冬地もかなりの数に上がってマスコミの対象にはなるが、同地における良心的・継続的な調査値は望み得ない。これらの渡来地に対してどのような手を打ったらよいのか。単年度（1ないし2年間ぐらい）の飛び石的調査なら可能性があるのではなかろうか。

### V 定時定点調査資料の蓄積タイプとその利用

次に一部前項にも取り上げた問題点も含むが定時定点調査地の調査資料の蓄積タイプを図化すると下に示すように大別出来る。

タイプA・B・Cは調査開始すなわち昭和48シーズン以来のものであるがBは途中で息切れしながらも何とか命脈を保っている渡来地のもの。Cは挫折もしくは放棄したもの。

タイプD・E・Fは途中からの参加であるがDは完遂型、Eは花火型、Fは思い出し型、そしてタイプGは復活型と見ることが出来る。



各定時定点調査地とその調査資料蓄積はA～Gのどのタイプに属するであろうか。ひとつの例を上げるならタイプA・B・Gは初期の頃と後期（現在）の対比に耐え得る。タイプAに属する調査値の資料が多い程良い結果が期待できる訳であるが、それでも日本のハクチョウ類の相対的論述資料とはなり得ないことは明白である。定時定点調査資料を駆使しての論文・報告文が殆ど見られな

いのは、以上に見た蓄積資料タイプから首肯出来そうである。「特定の期間」を設定しての比較調査などは出来そうである。

## 結 言

「定時定点調査」という単一種について画期的な調査方法を創出し実施してきたものの、前項でみたような諸問題を内蔵して、はたして信頼するに足る基礎資料たり得るであろうか。日本で越冬するハクチョウ類に対して一斉に給餌を中止したら果たして幾パーセントのハクチョウたちが繁殖地に北帰する事が出来るであろうか。「半数にも満たないのではないか？」という見方は過剰であろうか。『何が彼女をそうさせたか』という活動写真（映画）の題名が脳裏を掠めた。「定時定点調査」はこの一つの種の存亡に関わる問題の解決に結び付く資料となり得るであろうか。資料の解析・必要項目の新設・新開地のチェックなども含めて創設20年目の節目を迎え、今後のあり様を検討すべきである。